(2)　「獣医師が支援する動物介在教育」
群馬県獣医師会、群馬県教育委員
桑原保光

群馬県獣医師会では、平成１０年度から全県下に渡って、学校や幼稚園の指導をやっております。連携をとっている獣医師という立場で、幼稚園の動物飼育や、特に今日は小学校の生活科の動物飼育等の体験について、お話をさせていただきます。

群馬県では、ここにもありますように、「子どもを育てるなら群馬県」ということで、県政の姿勢自体が子どもに力を置こうという方針でいます。そこで、平成１０年に全国の新聞に１面広告で、「小学校に獣医師さんを校医としておきます」ということを発表しました。このことは、せっかく学校で動物を飼っているのであれば、子どもが怖がらずに動物にさわれるような教育指導が重要ではないか

ということで、始まりました。実際に、群馬県の小寺知事がふれあい教室にも参加しながら、子どもが学校や幼稚園で飼っている動物をかわいがって面倒見るような指導を、是非獣医師にお願いしたいということで、平成１０年度から始まりました。

では、獣医師が支援する小学校の動物介在教育とは何なのかと考えますと、実際、動物介在教育という言葉はみなさんが聞き慣れないことで、海外で、人と動物の関係学というなかで、「アニマル　アシステッド　エデュケーション」というものがあり、直訳すると動物介在教育ということになります。簡単にいえば、学校での飼育＝動物を介した教育なんだということです。学校で動物を飼うときには、ペットとして飼うのではなくて、教育の一環として飼うんだという位置づけをしようということです。

では、学校での動物飼育に、今一番何が必要かというと、群馬県では養育心の育成と命の教育を、学校現場で動物を飼うことをとおして行ったら一番いいのではないかと考えております。その中で、特に動物飼育の基礎基本を、学校の先生方は専門家ではないので、勉強してこなかった、ということが大きな課題になっているということが、群馬県の学校と連携をとることによってわかってきました。では、基礎基本というのはどういうことかというと、動物を子どもたちにさわらせたり、ふれさせたりするのに、幼児教育の現状と動物飼育という観点から本当に考えているんだろうか、という疑問が一つあります。二つ目に、児童の発達心理と、動物のかかわり方をどうしたらいいか、何歳児がどういう動物を好んで、どういう時期にどういうことをやってあげたら子どものためになるんだろうか、ということを、もう考えなくてはいけない時代になったと思います。三番目には、ヒトと動物の関係について、先ほど唐木先生のお話にもありましたが、イヌが、人間の近くに来たのが１万年前です。そこで、家畜、ペットと、いろいろな状況について、

よくその基礎基本を指導者が勉強しなければいけない時代に来たと考えます。最後に、飼育管理方法について、もう、基準を作らないと、学校や幼稚園の飼育において、先生それぞれの自己的な限界があり、「私は動物飼育はこうやりたい」という幅がたくさんあるので、それを統一するにはどうしようかということから、獣医師の立場で考えるようになりました。

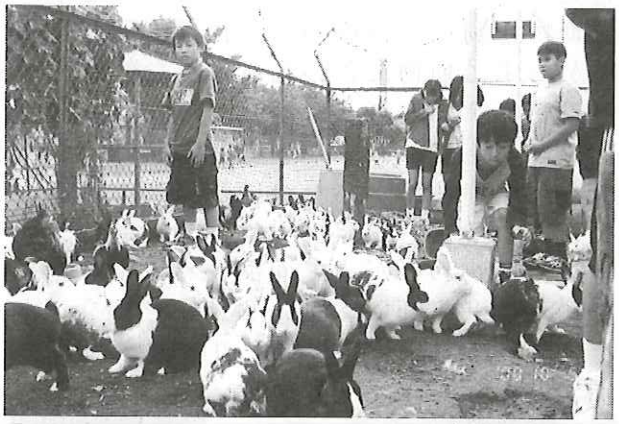
ここにもありますように、これは、高知県原産のプチコッコというニワトリです。手乗りニワトリといって、８００ｇくらいで、手に乗って、おとなしくしているような、こんなかわいい動物と、楽しい時間を過ごさせてあげるということが、幼児教育において一番大切なことです。この延長線上に小学校で飼育をどうしたらいいか、ということを考えますと、やはり、小学校で指導者が、子どもと、「たのしいね」、「かわいいね」というように、楽しさを共有できるような指導者がいないと、子どもは共感を持つことができません。そうすると、子どもの発達の状況に悪影響を与えるということがいわれています。

では、小学校ではどうしたらいいかというと、先ほどお話ししたように、やはり、養育心の育成をして、子どもたちが自主的に飼育に携わるような指導が必要だと思います。その指導によって、「動物がかわいい」と子どもたちが感じるようになってはじめて、本人たちは「放っておけない」、「僕たちが面倒を見なければ死んでしまう」、というような存在に動物をするということが、小学校生活科のスタートラインに立たせることです。放っておけない飼育をさせるには、まず、「かわいい」と思わなければ、スタートラインにつけないんだという意識を教育者がもっていないと、うまくいかないということになります。是非、スタートラインに立たせられるような動物飼育の基準をつくっていこうということで、考えてみました。

では、その放っておけない存在になった動物ということになれば、指導者のいろいろな問いかけに興味関心を抱くようになるわけで、たとえば、「ニワトリにも耳があるの？」と問いかければ、「ニワトリにも耳があるよ」などと答えるようになるわけです。このように、動物の命について、直に理解ができるようになるのです。

では、動物飼育で感性が育つといいますが、実際、どうすれば感性が育つかというと、先ほど説明したような放っておけないかわいい動物を飼育するなかで、いろいろな感情体験、たとえば死んでしまったりすることもあるでしょうが、そういう感情体験のなかで、子どもたちは生命観を育んでいくはずです。二番目には、自分の役割がどうだったのか、責任を通じた飼育の体験が、心にいろいろなことを響かせて、「こんなことをしてはいけないんだ」、「塾があるからといって、エサや水をあげないと死んじゃうんだ」、というような倫理観をもつようになるわけです。そんななかで、いろいろな経験をしながら社会性を身につけたりすることによって、人格形成を伴った成長を続けていくわけです。こういう体験を小学校低学年の生活科ではさせなくてはいけないと考えます。

では、学校の現場を見るとどうでしょうか。これは、群馬県のある小学校の事例です。よく見ていただくと、ウサギがいっぱいいますよね。ここにはいろいろな考え方がありまして、「いっぱいいていいなー」、「自然に死んでしまうのも仕方がないよ」という教育者もいます。生まれるのも自然、

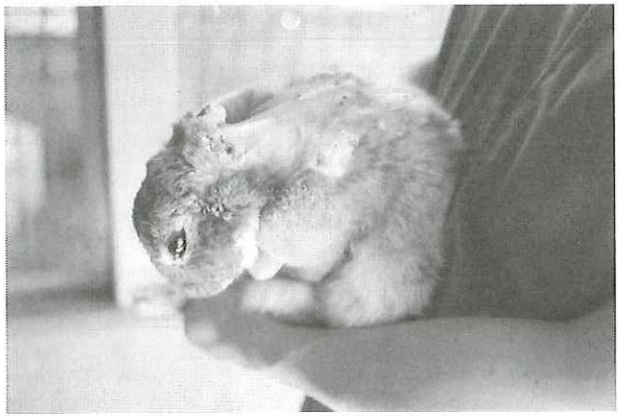


死ぬのも自然、この「自然」という言葉に逃げているのではないかと思うのです。動物飼育の難しさは、多頭飼育や、動物舎の構造が原点なんです。そして、このような多頭飼育の入り口には、「○○動物園」とか書いてあったりします。学校に動物園があって、何か役に立つの？と聞きたくなります。このようにいろいろな問題を秘めているのです。すなわち、先生方が自分の好

き勝手に、「動物飼育はこうあるべきなんだ」という考えをもったまま飼育が行われているわけです。保護者から見れば、動物虐待だとか、こんな飼育をして、教師の資格があるのかとか、いろいろ指摘されるような問題が、ここにはあるのです。これは、きちんとした飼育基準がないから、各個人の先生方が自分の経験や判断でしてしまうことによって起こることなのです。

この（多頭飼育の）様子を観察している子どもを見てみると、「気持ち悪い」、「さわりたくない」という態度を見せている子もいれば、「おもしろいなー、つかまえてやろう」などと思って近づいていく動物好きの子どももいます。また、呆然としている子どももいたりします。このように、いろいろな感覚を抱いている子どもがいるということを理解して、学校の授業でやっているんだから、やはり、嫌いな子も何か得るものがあるような勉強をさせることが、指導者の双肩にかかっているといえるのです。

この写真をよく見てください。本来、アナウサギは、耳が二つあるわけです。またここ（耳の後ろ）は本来は毛が生えているわけです。これは、先ほどの多頭飼育でよくあることですが、「金網デスマッチ」の結果起こってしまったことなんです。自然に穴を掘る姿を見せるのがいい、という人もいますが、多頭飼育では、テリトリー争いの殺し合いをしているんです。このウサギを抱くと「キー、キー」って鳴くんです。年中いじめられているものだから、すべてから逃げようとしているんです。こんな状況を飼育委員の子どもが見ているわけです。「ウサギさんはかわいい」、「うちの学校にはウサギさんがいるんだよ」などと思っている１年生が、こんな状況をみて、



どう思うと思いますか。教育的にいい影響があると思いますか。やはり、学校の飼育というものは基準をつくって、きちんと飼育していかなければなりません。学校で飼育されている動物は、「学校の動物」という認識が強く、「みんなの動物」という意識が薄いと思います。これを改めていかなければいけないと思います。学校は、命の対応をしっかりとしていく必要があると思うのです。

この写真は、群馬大学の生活科の講義の様子です。ウサギが苦手な子にはどのよう

にするかということを考えてみると、せっかく学校にウサギがいるんだから、タオルを使って抱いてやれば、抱けるようになる子もいるよ、という様子です。子どもの気持ちをいろいろ配慮してあげれば、抱けるようになる子もいるし、嫌いだけど面倒は見られる、嫌いだけどさわることはできる、という指導をする必要があると、学生には言っています。そのなかで、実習とうもやっていますが、子ウサギを連れて行くと、大学生でもすごく楽しそうな表情をします。聞くと、「ウサギってこんなにかわいいと思わなかった」、という答えが返ってきます。学生たちは、学校のウサギについて、くさい、汚い、逃げる、という印象しかもっていなかったようです。そんな学生さんが教師になって、学校の飼育動物をよく扱ってくれるはずがありません。これから、飼育を動物介在教育として考えたらどうなのか、というように考えています。

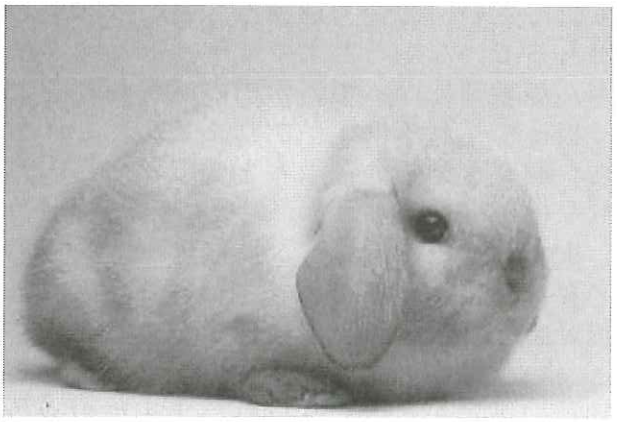
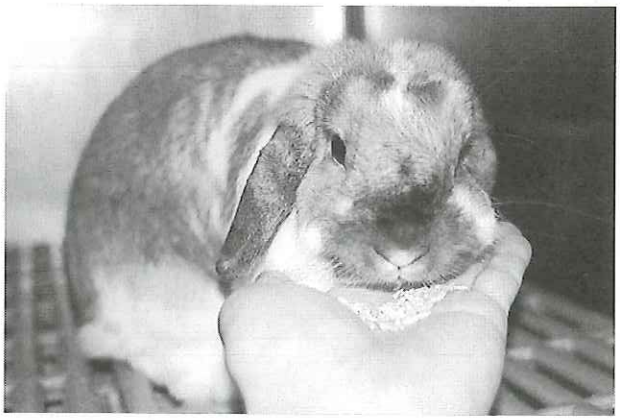
まず、学校の飼育は計画的な飼育管理が必要なんだということです。教育計画に基づいて、学校は子どもに何を教えるためにどういう動物を飼ったらいいかという、動物種の選定から入らなければまずだめであ

るということです。では、学校の教育計画に基づいて、飼う動物が決まったら、それによって、生活科の指導案を決めて、どういうふうに子どもに勉強を教えていこうかという、話し合いをしなくてはなりません。ここからスタートをして、まず、動物を飼うんだったら、飼育と栽培をかねて、食用植物、ウサギだったら何が好きかを考えさせながら、飼育栽培計画を立てるようにするべきです。学校では乱繁殖をさせないで、交配・妊娠・出産の計画を立てること、生まれた子ウサギの面倒をどのように見るかの計画を立てること、歳とったウサギの管理の計画を立てること、このようなことをみなさんで考えていただくことが必要です。このような計画のなかから、地球にはたくさんの動物たちがたくさんいて、その動物たちとどのように暮らしていけばいいのかというようなことに発展していくような計画も必要だと思います。

では、実際に動物管理基準の作成のポイントはどういうことかと言いますと、獣医師の立場で考えているのは、まず、生活科等の授業で、生命尊重の教育が、動物嫌いの原因にならないような配慮をする必要があります。たとえば、アナウサギが３キロにも４キロにもなって抱けなくなってしまったり、穴を掘って逃げていってしまったりしないような状況にすることが必要なのです。次に、子どもが動物の親代わりになって、親身に世話ができるような、小さな動物で、温厚な性格をもった動物を選ぶことが必要です。三番目には、これが一番重要なことだと思っているのですが、小学校１年生の年齢、体力、地域の状況など、いろいろなことから考えて、動物種を選ぶことが必要です。最後には、教育計画によって、飼育年数と頭数を決めることです。教育計画のなかに飼育計画をつくらないために、計画性のない飼育が行われ、多頭飼育になってしまうようなことがあってはいけません。

群馬県獣医師会が平成１０年度から、目的にあった動物種を選び、小学校生活科で飼うのに適している動物を選定することを提唱しています。ここにいるのがホーランドロップというウサギの種類です。体重が１．５キロくらいで、非常に温厚な性格です。学校のアナウサギは、だいたい３キロ～５キロくらいで、ホーランドロップの倍以上の重さになり、性格も荒いことが多いです。こちらはプチコッコといって、８００ｇくらいの愛玩手乗りニワトリと呼ばれていて、高知県で開発をしています。

現在、県の教育センターと獣医師会との連携によって、教室内でホーランドロップのような飼いやすい動物を飼うことによって、命の教育実践を行おうという活動をしています。教室内で飼育することによって、小さいうちから躾を行うことができ、そうすることによって、人間の手からエサをとるような、人なつっこいウサギになっていくんです。ただ放ったらかしにしておいて、愛情もなく育てると、先ほどの脳科学の話にもありましたが、逃げようとか、攻撃しようとか、そんなことしか考えないウサギになってしまいます。

この写真を見てください。このウサギは小麦が大好きで、小麦を見せると遠くから走って寄ってきます。こんなかわいいウサギを、子どもたちが世話することができたら、喜ぶと思いませんか？

ウサギの巣作りを知っていますか？ウサギの妊娠期間は３０日で、妊娠１５～２０